

白い影

小川未明

青空文庫

夏なつの日ひのことでありました。汽車きしゃの運転手うんでんしゅは、広い野原ひらのの中なかにさしかかりますと、白しろい着物きものを着た男おとこが、のそりのそりと線路せんろの中なかを歩いていあるるのを認めみとめました。

このあたりには人家じんかもまれであつて、右みぎを見ても左ひだりを見ても、草くさの葉はがきらきらと、さながらぬれてでもいるように、日ひの光ひかりに照てらされて光ひかつていました。また、遠近おちこちにこんもりとした林はやしや森もりなどが、緑みどりいろ色のまりを転ころがしたようにおちついていて、せみの声こえが聞きこえていました。

白しろい男おとこを見みると、運転手うんでんしゅは、ハツと思おもつて、あわただしく警け笛いてきを鳴ならしました。なぜなら、汽車きしゃがちようど全速力ぜんそくりよくを出だして

して走はしつていたからであります。

しかし、白しろい男おとこは平へい氣いきで、やはり線路せんろの内側うちがわを歩あるいていました。もうすこし早はやく、これを見みつけたら、こんなに運転手うんてんしゅは、

あわてることもなかったのでしょうけれど、このあたりはめつたひとに人の通とおるところでなし、安あん心しんをして、彼かれは前ぜん方ぽうに見みえる遠とおい国境こつきょうの山影やまかげなどをながめて、その山の頂やまいただきに飛とんでいる雲くものあたりに空想くうそうを走はしらせていたのであります。

白しろい影かげは、もう、二十間けん……十間けん……すぐ目の前まえに迫せまりました。運転手うんてんしゅは大急おおいそぎで進しん行こうをしている汽き車しゃを止とめました。その反動はんどうで、どうしたはずみにか、列車れつしゃは大脱線だいだっせんをしてしまいました。おりよく、それが貨車かしやであったからたいした負傷者ふしやうしやは

なかつたけれど、貨車は幾台となく壊れて、田の中に埋まつた
り、堤防の上に転覆したりして、たいへんな騒ぎになりました
た。

運転手は、負傷をしました。そして、うめきながら、白い
着物を着た大男をひき殺したと告げました。

それで、みんなは、汽車の転覆の原因が、人をひき殺そう
としたため、急いで汽車を止めたのにあつたことを知りました。
それにしても、こんな大事件をひき起こした男は、どうなつた
かといつて、みんなは、汽罐車の下をのぞいてみました。そこ
には白い着物を着た男がひき砕かれて血みどろになっているだろ
うと思ひましたのに、なんの姿もありませんでした。

「白い男なんて、いないじゃないか？」

「どこにも人間はおるか、ねこ一ぴきだつてひかれていはしないじゃないか。」

みんなは、こう口々にいいました。そして、これはまさしく
運転手が、むだ目を見たのだといいました。

あくる日の町の新聞には、運転手がむだ目を見たために、
貨物列車を脱線さしてしまつたことを大きく書いていました。

そして、運転手は、このごろ、神経衰弱にかかつていたと
いうこともつけくわえて報道しました。

すると、ここに、白い着物を着た大男が、その後も真昼ごろ、
のそりのそりと線路の上を歩いていてのを見たというものが

ありました。なんでも、その人の話ひとはなしによると、雲くもをつくばかりのおおとこ
大男おおとこであつたといふのでした。

こうした奇怪きかいな話はなしは、これまでに、二度どめであります。この鉄て道線つどうせん路ろは、西南せいなんから走はしつて、この野原のほらの中なかでひとつうねりして、それからまっすぐに北ほつぽう方ほうへと無むげん限げんに連つらなつていたのでした。

この前まえこの地方ちほうに、稀有けうな暴風ぼうふうが襲おそつたことがあります。そのときは、電信柱でんしんぼしらをかたつぱしから吹ふき倒たおしてしまいました。高い木たかきは折おれ、家いえは倒たおれ、橋はしは流ながれてしまったので、じつに、天て地ちは真まつ暗くらになつたのであります。人々ひとびとは、そのときの恐おそろしかつたことをいまでも記憶きおくしています。やはり、その当座とうざ、一つ
のうわさがたちました。

なんでも、暴風ぼうふうは、黒い太い棒くろふとぼうになつてうずを巻まいて過すぎて
いった。あの暴風ぼうふうがくる前まえ、灰色はいいろの着物きものを着きた、見上みあげるば
かりの大男おおおとこが、この鉄道線路てつどうせんろの上うえをのそりのそりと歩あるいて
いたのを、見みたものがあつたというのであります。

それで、このたびも運転手うんでんしゅが、白い着物きものを着きた大男おおおとこが、
線路内せんろないを歩あるいているのを見みたといつたことが、かならずしも、
むだ目めばかりでないといつて、みんなに不安ふあんを抱いだかせたのです。
線路せんろは修繕しゅうぜんされて、やがて列車れつしやは、いままでのように往お
復うく復ふするようになりましおな。その後ごになつて、ふたたび同おじよう
な事件じけんが繰くり返かえされました。

もとより、これは、別べつな運転手うんでんしゅで、もつと年としをとつた熟じゆくれ

練おとこな男おとこでありました。その汽車きしゃには、大臣だいじんとたくさんな高等こうとう官うかんが乗のつていました。この野原のほらにさしかかると、汽車きしゃはしきりに警笛けいてきを鳴ならしつづけましたが、不意ふいに、停車場ていしやばでもないのに止とまってしまつたのです。

「どうしたのだ？」といつて、みんなは、客車きやくしやの窓まどから頭あたまを出だして、外そとをのぞきました。運転手うんでんしゆや、その他た、汽車きしゃの勤務きんむい員いんは、車内しやないから飛び降りとりて、前方ぜんぽうの汽罐車きかんしやの方ほうに向むかつて駆かけていきました。

「ひいたな？」と、客車きやくしやに乗のっている人々ひとびとは、頭あたまを出だして、その方ほうを見みながらいいました。

また、一等室とうじつからも、大臣だいじんや、高等官こうとうかんの顔かおがちよつとばか

「あらわ
り現れました。しかしその人たちの顔は、じきに引つ込んでしま
いました。けれど、内部では、やはり他の客車に乗っている
ひと
人たちと同じようなことをいって、うわさをしていたにちがいは
りません。」

「不思議だ！」という声こえが、あちらにも、こちらにも起こりはじ
めました。

「いったい、どうしたことかな？」と、大臣だいじんは眉まゆのあたりをし
かめて、おそばのものにたずねました。おそばのものは、さつそ
く、汽車きしゃの監督かんとくを呼んで、子細しさいをさらにたずねたのであります。
監督かんとくは恐縮きようしゆくして、いまあつた事実じじつを答えました。

「線路内せんろないを歩あるいていくものがありますから、笛ふえを鳴ならしたので

す。」

「その笛ふえの音おとは私わたしも聞きいた。」と、シルクハットをかぶった高こうと等官うかんはうなずきました。

「歩あるいている人にんげん間は、耳みみが聞きこえないとみえて、いつこう平気へいきで、汽き車しゃが後あとからくるのを気きづかなかったのです。しかたがないもので、汽き車しゃを止とめました。しかし、そのときは、もう遅おそかったか、歩あるいている人にんげん間のそばまで汽き車しゃが走はしつていきました。」

「ひいてしまったのか？　しかし、前ぜん後ごの事じ情じょうを聞きけばしかたがないことだ。」と、高こう等官とうかんはいいました。

「いえ、ところが、線路せんろの上うへにも血ちが流ながれていず、またあたりに

も、その人にんげん間の影かげが見みえないのです。」

「どんなようすをしていたのか？」

「やはり、白い着物を着ていたといいます。」

「こう答えて、監督は、高等官の顔を仰ぎました。」

「最近、汽車が脱線したときも、それだったじやないか。また、運転手がむだ目を見たのではないか。」と、高等官はい

いました。

「今度は、二人も、三人も、白い着物を着た男を見たものがあるのです。」と、監督は頭をかしげながら答えました。

おそぼの者は、このことを大臣に申しあげました。すると、大臣は、大きな体をゆすつて、

「このたびは、脱線をしなくて、命拾いをしたというもの

じや。」と、驚いたような、喜んだような顔つきをしていいました。

大臣の乗っていた列車が、途中不時の停車をしたとい
うので、また問題になりました。そして、あくる日の町から出
る新聞には、運転手が、どうしてこのごろ、こうむだ目を見
るのか？ 気候の変化で、もしくは、過度の労働でみんな神
経衰弱にかかっているのではないかという疑いを起こしてい
ました。

その後は、汽車が進行してくる際に、たとえ線路内に、子
供や老人の影を見ましても、運転手は警笛を鳴らさずに進
行をつづけることがありました。

「これも、きつとむだ目であらう。」と、彼らは思ったからであります。

たちまち、責任問題が起りました。轢死者の数が著し

く増したからです。なぜ、警笛を鳴らさなかつたか？ 被害

者の側では、こういつて、鉄道側を非難いたしました。

白い影は、鉄道線路を伝つて、ついに街の方へやつてきまし

た。こんどは、街のあちらこちらで、白い影のうわさが盛んにな

りました。

「今日、向かいのご隠居が、取引所で、白い男がみんなの中

に混じつて見物していたといわれました。それで、昼過ぎから

の株がたいへんに下がつて、大騒ぎだったそうですよ。」と、

あるところでは、おかみさんが近所の人に話をしていました。

「白い男しろ おとこつてなんでございますか？」

「白い着物しろ きものを着た、気味きみの悪い男わる おとこだそうですよ。」と、おかみさんは答こたえました。

そこへ、ちようど隠居いんきよが通りかかりました。二人ふたりの女おんなは、おじいさんおじいさんを呼よび止とめました。

「おじいさん、あんたは、白い男しろ おとこををごらんなさったのですか。」と、一人ひとりの女おんなはたずねました。

「めつそうな、私わたしが見みたら、いまごろは破産はさんせんけりやならん。白しろい、気味きみの悪い目わる目めつきをした男おとこが見物人けんぶつにんの中なかに混まじつて、じつとしていたということだな。なんでもその男おとこを見みたものは、み

んな株かぶに損そんをしたという話はなしじや。」と、おじいさんはいいました。
 ある日ひ、街まちの四よつ角かどのところで、電でん車しやと自じ動どう車しやとが衝しょう突とつしました。自じ動どう車しやはもはや使し用ようされな^いま^でに壊こわされ、電でん車しやもまた脱だつ線せんして、しばらくは、そのあたりは雑ざつ踏とつをきわめたのであります。そして、怪けが我にん人もできま^した^{ので}、電でん車しやと自じ動どう車しやの運うん転てん手しゆは、警けい察さつへいつてし^らべ^られる^こと^になり^ました[。]

「どうして、衝しょう突とつをしたのだ？」とい^つて、警けい官かんがききま^すと、自じ動どう車しやの運うん転てん手しゆは、そのとき^のこ^とを思おもい浮うか^べる^ような目めつ^きを^して、

「晩ばん方がたであり^ました[。] 両りやう側がわには、燈とも火しびのつ^いた^ころ^あい

です。電車の停留場には、たくさん人が立っていました。私は注意をして、それらの人たちを避けながら走っていますと、目の先へ、小さな白い着物を着たおじいさんが、ちよこちよここと出てきたから、私はとつさのことですし、たいそう狼狽しました。その前まで、そんな老人が歩いていることに気づかなかつたのです。私はひくまいと思つて、全速力で脇の方へそれますと、そのとたんにやってきた電車と衝突したのでした。」

と申しました。「その着物を着た老人はどうしたか？」と、警官はききました。

「不思議にも、その間に老人の姿は消えたように、どこへいっ

てしまったものか見えなくなりました。」と、運転手は答えました。

「おまえの見た、白い着物を着た老人というのは、大男ではなく小さかったのか？」

警官は、これまで、大きな白い男が、影のように線路の上立って、幾たびか汽車を脱線さしたり、また止めたりしたというわさを聞いていましたから、いま小さな白い男だと聞いて、異様に感じたからであります。

「私たちの見たのは、白い小さなおじいさんでした。」と、両方の運転手は、はつきりと答えました。

「いつ、そんなに小さくなったのか？」と、警官は、くびをか

しげました。

「そのことは、わたしに、わかりません。」と、運転手は、おそれるおそれる答えました。

この白い影が、この町に入ってきたことは、どんなにみんなの生活の上に不安を与えたでありましょう。ほんとうに、ペストや、コレラが入ってきたよりもおそろしい、防禦のできない事実であったからであります。

しかし、白い影が、ある人の目に見えて、ある人の目に見えないという理由はない。それを見る人は、気候の関係で、また神経衰弱にかかったからではなからうかというような解釈をした人がありましたが、実際において、気づく人と気づかな

ひととの相違があるということに、ほぼ輿論はきまつたのであります。

そして、いちばん困ったことには、なにか自分の不注意で、失敗をしたものが、白い影を見たからといって、ほんとうは、見もしないのに、すべての過失を白い影に帰してしまつたことでありました。

「白い影をつかまえることにしよう。」
 まちひとびとは、こう話をきめたのであります。そして、その正体を見とどげようと思ひました。

まだ暑い、夏の時分、野原を白い男がさまよつているときは、大きな雲つくばかりの体でのそりのそりと、真昼の線路を歩いた

ものであるが、街まちに入はいつてからは、小男こおとことなつて、晩方ばんがたから夜よるにかけて、多く人混みおとごの中なかに出でかけるようになりまし。それで、捕とらえることは困難こんなんであつたのです。しかし、だんだん白しろ地の浴衣ゆかたを着きる人が少なくなつて、みんな人々ひとびとが黒くろつぽい着物きものを着きるようになつてから、一方ほうでは、やつと白しろい影かげを捜さがすのに都合ごうがよくまりました。

幾いくにち日ひかたちましたけれど、まだ、白しろい男おとこを捕とらえたものはありませんでした。なんでも、このごろは、白しろい男おとこは、月つきのいい寒さむい晩ばんに、町まちの屋根やねから、屋根やねを伝つたつて、星ほしのように飛とんでいるのを見みたというものが、あちらこちらにありました。

「地震じしんがあるのではなからうか？」と、一時じは、こんなうわささ

えしたものがあつた。また夜はなるべく外に出ずに、白い影を見ないものと、早くから戸を閉めてしまふような臆病者も少くはなかつたのであります。

すると、こんどは、いままでとはまったく違つたうわさがひろまりはじめました。

「今年は、いままでにないことだ。暴風もこず、米はよくできて豊年だ。昔の人の話に、白い影が入つてきた年は豊年だといふことだ。」というようなうわさがたちはじめると、

「大河にかかつている鉄橋の根もとが腐れていたのをこのごろ発見した。白い影が線路の上を歩いていたのは、それを注意するためだつた。」と、いうような説が、後から後からつづ

いて起こつたのであります。

町の新聞は、また白い影を科学的に批評をしていました。

ある理学士は、白い男のように見えたのは、水蒸気のどうかし

た具合で、人間の形に見えたのであろう。秋から冬にかけては、

毎夜のごとく、月のいい晩には、白いもやがいろいろの形で立ち

上るものだ。また、夏の日、野原で見た、白い大男というの

も、おそらく同一の現象で、雲のようなものではなからうか

と行って、なんでもなく、それを解決していました。

最初、白い男を見て、汽車を脱線させたばかりでなく、自

分も負傷した運転手は、神経衰弱から、むだ目が見えた

のだと判断されたものの、とにかく汽車を脱線させた責任

から退たいしよく職させられて、いまでは、町まちに近い港ちかみなとの汽船問屋きせんどんやに勤つとめていたのであります。

もう秋あきも末すえのことでありました。今夜こんやにも、冬ふゆがやつてきそうに、空そらの色いろは澄すんで海うみの色いろはさえていました。野原のほらの中なかの林はやしも色いろづいて、こずえからは、黄色きいろい葉はがひとりでにこぼれるように、ほろほろと落おちていました。また、街まちの並木なみきの葉はは、たいてい落おちつくしてしまつて、黒くろい小枝こえだの先さきが青あおい空そらの下したに細こまかく、網あみの目めのように透すいて見みえていました。

この港みなとから、南洋なんようの方ほうへゆく船ふねは、今夜こんや出でてゆくのが今年ことしじゆうの最さい終しゆうでありましたが、あまりそれには乗のつてゆく客きやくもなかつたのです。

夕陽は、岡を染め街に沈みかかっています。そのとき、汽船の待合室に、いつかの運転手は、一人の不思議な女をみとめました。

目の美しい、髪の毛のちぢれた娘が、燃えるような赤マントを着て、たった一人ベンチに腰をかけて、悲しそうな目つきで、海の上をながめていたのです。そして、娘は、手の中に、小さい真つ白なねこを抱いていました。人が近づくと、その白いねこは消えたように、マントの下に隠れてしまいました。そして、だれもそばにいなくなると、また、真つ白なねこは、娘の手の中に入って遊んでいたのです。

「この町を騒がした白い悪魔は、こいつでなかったか？」と、い

つか^{ふし}負^{しょう}傷^うした^{うん}運^{てん}転^し手^ゆは、ふと心^{こころ}に思^{おも}いました。そして、今日^{きょう}、
船^{ふね}に乗^のつて沖^{おき}へ出^でていってしまつたら、もうこの町^{まち}に不安^{ふあん}はな
なるだろ^{おも}うと思^{おも}いました……。はたして、それから、もう白^{しろ}
影^{かげ}を見^みたものはありませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「婦人公論」

1923（大正12）年1月

※表題は底本では、「白《しろ》い影《かげ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

白い影

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>